法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<随想>思い出一束

阪下, 圭八 / サカシタ, ケイハチ / SAKASHITA, Keihachi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
57
(開始ページ / Start Page)
103
(終了ページ / End Page)
105
(発行年 / Year)
1998-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019996

思い出一束

阪下　圭八

杉本圭三郎氏と小生とは、一九二七年生まれの同い年である。四〇数年来のつきあいだが、交友がいつどのように始まったかは、あまり記憶がさだかでない。こちらは、一九五三年法政日文科を卒業、三年間日本文学協会の禄を食んだのち、五六年、法政大学院に入っている。杉本氏も同時の入学だが、初対面ではなくすでに顔見知りの間柄であった。多分氏は、法政の二部学生だったころから、日文協に入会し学生としてはかなり熱心にいろいろな研究会に出席しており、おのずと事務局にいた小生と言葉を交わすようになったものと思う。

大学院では二人とも西尾実、西郷信綱、表章教授のゼミに出ていたから、当然親しくなってゆくわけだが、さらに近しい仲となったのは、両名が五九年四月、一緒に法政の文学部助手に就職したことによる。

――同学部同学科で一ぺんに二人の助手を採用する――。〔学則〕に助手の定員をどう定めているか知らない。しかし、慣行上からどう見てもこれはかなりの異例人事に属するはずである。そんな異例がどうして生じ、またどうして認められるにいたったのか。もはや三十九年前のこと、小生にも不分明なところなしとしないが、要するに研究助手の職を予約された人間が二人おり、どちらかが降りるという調整のつかぬまま、結局二人とも任命されたということだろう。

といえば至極簡単なようだが、決してすんなりと文学部教授会の議を通過したわけではあるまい。異例が通るにはそれ相当の困難があったはずで、それをあえて進めてくださった、当時の文学部長重友毅

先生はじめ日文科の近藤忠義、長沢規矩也、古田拡、小田切秀雄、小原元そして前記した諸先生方、さらには大学総長大内兵衛先生に深甚の謝意を表したいと思う。(重友先生のお話では、この人事を通すには総長の決裁が必要だったよしである。)ご尽力のおかげをもって、ともかく二人の若者に――どちらも三十一歳になっていたが――研究者への道が開かれたのだった。

杉本・阪下には似た者同士の面が多い。就職して最初のボーナスをもらったころだったか、小生は池袋のデパート丸物(今は西武百貨店に併合されている)でつるしの夏背広を求めた。うす水色のなにやらうれしそうな色合いで、五・六千円だったと思う。日ならずそのおニューを着用に及び、研究室へ出勤する。――なんとそこには、全く同じ背広を着た杉本氏がいるではないか!聞けば同じデパートの同じ特売場での購入とか、図らずも二人は、おそろいの姿で何年かの夏季を過ごす羽目になったわけだ。

そのせいかどうか、両名はしばらく足並そろえて日を送ってゆくようになる。六〇年安保の年、数カ月の差で結婚、会場は市ヶ谷・私学会館のしかも同じ部屋、媒酌人も同じく近藤忠義先生ご夫妻を煩わせている。小生の方が先だったので、杉本氏は式次第・進行など、阪下のを見本にすればいいから楽だとしきりにいっていた。明くる年、ともども長男誕生。なにしろ同年の卯どしで、名前まで「圭」の字を共有するくらいだから、似たり寄ったりは宿命みたいなものかもしれない。

しかし、同じ星の下の両名もやがて岐路にさしかかる。修士論文が『太平記』、『方丈記』と、ともに中世文学だったが、杉本氏が軍記ものを中心とする一筋の道を歩み続けるのに対して、こちらは古代にさかのぼって、『古事記』『万葉集』をもっぱらにするようになる。

一九六二年、助手任期満了後、二人ながら文学部・第一教養部の非常勤講師を一年勤めてから、小生は東京経済大学から招かれて専任講師となり、杉本氏は法政に残ってやはり専任講師になったのだった。以降、どちらも全く他へ動くことなく、今年度めでたく定年退職の時を迎えたという次第。

面白くもなんともない、昭和ひとけた似た者同士の似たような足跡だが、ただそうした外見上の類似にもかかわらず、双方の人間としての中身はかなりに異なることをいっておく必要があろう。六、七年

前、杉本氏の、講談社学術文庫『平家物語全訳注』十二巻の完結を祝う会で述べたことを繰り返すなら、杉本圭三郎の人柄を一言で約めれば、「剛毅木訥仁に近し」ではなかろうか。どちらかというと寡黙。浮華の言などめったに口にせず、孜孜として励むというのがかれの行き方であり、その学問的結晶が『平家物語全訳注』であろう。氏は十二年の歳月をかけて全巻注釈三千数百ページの大業を成し遂げたのである。

対して小生はどうか。上記の席でも同じく論語を引用したのだが、こちらは「巧言令色すくなし仁」の方だろう。東京育ちの軽薄さが身についてしまって、正攻法よりもからめ手から意表をついたつもりで、得意顔するきらいなしとしない。三年ほど前、『ことばの散歩道』（朝日文庫）なる文字通りの小著を出した。（本誌上でも成島知子さんに紹介してもらっている。）あれこれの言葉一〇〇ばかりをとりあげ、それぞれの来歴、固有の意味などエッセイ風につづったもの。

本としての性質が違う以上、単純に比較しても仕方ないが、両書に二人の異質性はかなり顕著に浮かび出ているのではなかろうか。ただ小生にしてみれば、杉本氏の大著を前にすると、文学と言葉にいわば淫しつづけてきた我が身のさがを、若干じくじたる思いで振り返らざるをえないことはたしかだ。

きれいごとでいうなら、四〇年の交友は水のごときものではあった。それだけに、多少は生臭い「花も嵐も踏み越えて――」のような、愛憎・確執・毀誉褒貶のドラマが、すこしはあってもよかったかなと思わないでもないのだが、今はもはやぜいたくなくりごとだとすべきだろう。

（さかした　けいはち・東京経済大学経済学部教授）